

富士に祈る 72

國學院大學兼任講師 城崎 陽子

信仰と伝承 — 吉田胎内祭 —

先回までは、解脱会の開祖・岡野聖憲について記した。これは、岡野聖憲の生家・岡野家が富士信仰の家であり、解脱会そのものが「修験実証」をうたう宗派であることから、「富士信仰の派生」という視点でこれを概観してみることができたわけである。そして、これまで富士信仰の歴史の流れについて、人物伝を中心に近現代まで見てきたわけであるが、今回から富士信仰の行事について触れておく。その上で、あらためて現行行事の歴史の意義づけを行い、現在に残る姿を記録として留めておきたいと考える。

本シリーズ「富士に祈る」の冒頭で、富士信仰の具体相である行事を、

管掌者によって三つに区分した。一つ目は神社が管掌するもの、二つ目は御師団が管掌するもの、そして、三つ目が各地域の富士講が管掌するものである。一般に富士講行事と呼ばれるものは、三つめの行事を指す。しかし、行事は講社ごとに独自性を持ち、すべての行事は信仰として富士山に帰結するため、三者の行事には必ずし関連性が生まれる。そうした関連性に着目しながら、年間行事を通覧することで富士信仰の立体的なあり方を見てみたい。

年間を通じて行われる富士信仰の行事として、まずは四月二十九日に行われる吉田胎内祭をとりあげる。富士信仰にお



吉田胎内でのお焚き上げ

る当該行事の由縁は、食身身祿の残した『三十一日之巻』の七月十一日条にみる事ができる（引用は「富士講の歴史」所収の「三十一日之巻」を用いた。便宜を図り、句読点を施した）。

裾野の内吉田村より一合ほど登り、水の入丸桶と云ふ所に女の胎内の形あり。是人間出生母の胎内を印し置也。今以て母の乳房通ずる事絶ゆる事なし。信心の者参詣するといへども真の起りを知らず、ただ名所の拜所とばかり見あやまる也。仍て末世に及び母の乳通ぜぬの時に御胎より浅る処の露をいただくに、その身に通る事頭然なりかくの如く有難き所よく伝え聞すべし。

ここで、食身身祿は「胎内」というものの信仰的意義づけを「人間出生母の胎内を印置」ものとす。そして、「今以て母の乳房通ずる事絶ゆる事なし」としてその靈験を

説明。『胎内』は富士山の火山活動が生み出した溶岩洞窟の一種である。溶岩が冷え固まる際、洞窟内部に形成された模様があることから通称される。安産や乳の出に靈験あらたかとされ、洞窟内に染み出る水滴を手拭いにもらい受けてこれを産婦に飲ませると、乳の出が良いとされる。富士信仰が民衆宗教として成り立つ要素の一つでもある、「信仰の靈験」が民衆に寄り添う面がうかが

食行の教えによって、高田藤四郎が現在の船津胎内を発見したことは以前に触れたが、吉田胎内は明治二十五年（一八九二）六月、入間郡宗岡（現在の埼玉県志木市上宗岡）の星野勘蔵（行名・日行星山）によって発見され、開基された胎内窟である。星野勘蔵は、宗岡の初代先達となった高野源治郎から数えて八代目にあたる（『志木市の碑文』志木市教育委員会、一九九九年）。ちなみに、高野源次郎は高田藤四郎の弟子である。

さて、この吉田胎内が発見され、北口から富士登拝を行う講社は、中の茶屋から吉田胎内へ寄り、山頂を目指すというコースをたどるようになった。この胎内の祀官を勤めていたのが御師・梅谷家である。梅谷家は屋号を大梅谷、代々が梅谷監物、梅谷上総介を名乗っていた。現在残る梅谷家の系譜は梅谷秀秋を初代とし

ている（篠原武「梅谷家の系譜『MARBURI』四二号、富士吉田市歴史民俗博物館、二〇一四年）。そこから数えて十三代目の梅谷癸一が吉田胎内にある大正十五（一九二六）の石碑に胎内社の祀官として名を残しているのだ。当該の胎内社は昭和三十年代後半ごろまでは講社の人々を受け入れていたが、スバルラインの開通と前後して一旦途絶し、十数年の後、御師団管掌のもと、祭事が再興されて現在に至る。現行行事は、午前十一時にしじまる。「胎内」前にはしつらえられた祭壇に、北口本宮富士浅間神社の神官が献饌し、神社儀式に乗った祭事が行われる。その後、富士講の人々による「お焚き上げ」が行われる。これは、かつて行われていた祭事を復活したという位置づけになる。「お焚き上げ」は塩を盛った火壇の上に線香を山形に立て並べ、これに火をつけて「焚き

釋尊の御胎内

37 句・菅谷秀文

絵・橋本豊治

④ 三宝に帰依する事が仏教徒

三宝とは、仏・法・僧が仏教徒にとって、最も尊い宝であるとみなした表現である。

仏とは、釈尊の他、大日如来・阿弥陀如来・薬師如来他。

法とは、仏の説いた教え。

僧とは、サンガ、インドの言葉の音写語である僧伽の略語、出家者の集団を意味することの出家者を僧と称するようになった。

三宝帰依とは、仏教徒が心の拠り所となる仏・法・僧に救い場所を求める信仰を意味する。